



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

蒲生, 諒太

---

CITATION:

蒲生, 諒太. はじめに. 学びの海への船出 : 探究活動の輝きに向けて.  
Launch out into the ocean of learning! 2015: 1-15

ISSUE DATE:

2015-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/225057>

RIGHT:

## はじめに

本書は社会教育と学校教育を内包する「生涯学習」のあり方を探索するため、日本全国の学校で行われることになっている「探究活動」の実践モデルとその全容を明らかにする予備研究を記したものである。本書の内容は二〇一四年度京都大学総合博物館特別展「学びの海の船出―探究活動の輝きに向けて―」で収集した実践事例、関連講演をもとに構成している。

### 1. 「探究活動」を取り巻く現状

#### 探究活動とは何か？

現在、日本中の小中高校、特別支援学校では「総合的な学習の時間」という授業が行われている。この授業では「探究活動」ないしは「探究的な学習」と呼ばれる学習活動が推進されている。しかし、すべての学校でこの授業がうまく機能しているわけではない。各学校の創意工夫に多くを任されているこの授業には常に一定のやりにくさがつきまといっているのである。探究活動も同じく、現行の学

「たとえば、森俊二（二〇〇三）『できるか『総合』、総合学習と自治』『高校生活指導』二〇〇三年冬号、六―十一頁

習指導要領においてもその概要やモデル図は提示されているものの、多くの教師たちにとっては分りにくいものだと考えられる。

現在、日本における「探究活動」のイメージは「夏休みの自由研究」のようなものである。自分の興味のあることについて調べ、レポートやポスターにして発表する。「学習指導要領」ではもう少し詳しい定義が行われている。まとめると次のようになる。――自ら考え課題を解決する力、態度、主体性、そして、自分自身への振り返り。「探究活動」はこれらの力を子どもたちに身につけさせる学習活動である。そのプロセスは、まず、日常生活や社会での疑問や関心から自分で課題を設定することから始まる。次に具体的な問題について情報を収集・整理・分析、問題解決に取り組む。三つ目に明らかになったことや意見をまとめて表現する。最後にそこから新しい課題を見つけていく。

### 背景としての「知識基盤型社会」

このような学習活動が求められる背景には、いわゆる「知識基盤型社会」という時代認識がある。インターネットで何でも検索できる時代に、物知りであること＝知識が多く詰め込まれていることだけが重要ではない。大切なのは主体的に知識を獲得し吟味し生かしていく「学びへの主体性」、生産され続ける知識を大人になっても取り込み利用し続ける「生涯学習」の視点である。「知識基盤型社

会」という意味内容の曖昧な言葉が持つニュアンスはこのようなところである。

情報Ⅱ知識があふれる、これからの時代を生きる子どもたちが知識を主体的に活用し学び続ける態度と技法を身につけるため、探究活動は必要とされているといえるだろう。

### 探究活動は研究者の模倣？

このような探究活動を牽引しているのはSSH（スーパーサイエンスハイスクール）<sup>二</sup>と呼ばれる科学立国日本の未来ある若者を育てるための指定校である。類似したものとしてはSPP（サイエンスパートナーシッププログラム）<sup>三</sup>があり、こちらは大学と高校の連携によって行う科学教育プログラムである。近年はこれらの取り組みの国際教育版としてSGH（スーパーグローバルハイスクール）<sup>四</sup>が登場している。これらの取り組みでは、ほとんどで探究活動が行われており、大学の研究者が評

二 独立行政法人 科学技術振興機構・理数学習推進部「スーパーサイエンスハイスクール」

(<https://ssh.jst.go.jp/>) 閲覧：二〇一五年三月二〇日

三 独立行政法人 科学技術振興機構・理数学習推進部「サイエンス・パートナーシップ・プログラム」

(<http://www.jst.go.jp/cpse/spp/>) 閲覧：二〇一五年三月二〇日

四 初等中等教育局国際教育課「スーパーグローバルハイスクールについて」

([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/sg\\_h/](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/sg_h/)) 閲覧：二〇一五年三月二〇日

議委員や発表会の来賓として関わりを持っている。

これらの学校の活動においてその多くが大学での研究活動の模倣であると見受けられる<sup>五</sup>。子どもたちが仮説を立て、検証し、ポスターないしはスライドにまとめてプレゼンテーションを行う。これが基本の形である。

## 探究活動の厚み

そもそも「探究活動」は、*Inquiry Based Learning* (IBL) というアクティブラーニングの一種として世界中で行われているものである<sup>六</sup>。そもそもこの「探究」(*inquiry*)という用語がアメリカのプラグマティズムの思想家ジョン・デューイに端を発するのであるから、彼が作り上げたシカゴ大学の実験学校をはじめとした北米の学校でこのような教育が盛んであるのは腑に落ちることである<sup>七</sup>。

<sup>五</sup> 実際に科学研究者が高校生の探究活動の方法を説く書籍が出てきている。酒井聡樹(二〇一三)『これから研究を始める高校生と指導教員のために——研究の進め方・論文の書き方・口頭とポスター発表の仕方』共立出版など。

<sup>六</sup> Alvarado, Amy Edmonds, & Herr, Patricia R. (2003) *Inquiry-Based Learning Using Everyday Objects: Hands-On Instructional Strategies That Promote Active Learning in Grades 3-8*. Corwin

<sup>七</sup> たとえば、ハーロー大学附属実験学校

同時に日本においてもデューイらの教育運動である「新教育」の影響下で展開された「大正自由教育運動」の流れを汲む教育実践の多くには探究活動的要素が含まれていた<sup>8</sup>。

これらの事例は示すことは、探究活動はそれほどめずらしいものでもないし、世界中で、そして日本においても実践が積み重ねられてきているということである。

### 探究活動が学校に馴染まない歴史的背景

では、このような「厚み」を持つ探究活動がなぜ、現場で困惑と混乱を誘うのか。あるいは、なぜ、今更、学校現場に定着するように学習指導要領に示されるのか。

これらはほとんど歴史的な問題である。二十世紀の多くの時間を、日本の公教育は探究活動のような「経験」と「学習者の主体性」を重視した学習よりも、「教科の構造」と「座学での知識詰め込み」を重視した勉強に終始してしまったということ、その中で育った教師たちが経験を重視した学習を実践するための体験が不足していること、それにも関わらず近年は「経験」と「学習者の主体性」重視の学習へと変換を試みていること、これらの要因がある。

---

([http://www.oise.utoronto.ca/ics/Laboratory\\_School/index.html](http://www.oise.utoronto.ca/ics/Laboratory_School/index.html)) 閲覧：二〇一五年三月二〇日  
またたとえば、東京にある自由学園の教育 (<http://www.jiyu.ac.jp>) 閲覧：二〇一五年三月二〇日

## 2. 特別展「学びの海への船出」

### 子どもたちと「海」の展示を

このような状況の中で、二〇一四年度京都大学総合博物館特別展「学びの海の船出」は開催された。

当初、この特別展は小中高生と大学博物館が一緒に「海」をテーマに探究活動を行い、展示を作成するものであった。しかし、この目論見は、実際、かなりの無理があるものであった

私が途中から参加した際、このプロジェクトは暗礁に乗り上げていた。諸々の理由はあるが、第一に小中高校の現場において「探究活動」を行うノウハウが、大学関係者が思っている以上に蓄積されていないということだった。これは現場の問題であるとともに大学関係者自身の問題でもあり、双方の認識の共有不足に帰する問題であった。その問題の根は深く、その根幹は次のようなものになる。

——日本の現在の教育現場における「探究活動」なるものは、例えるなら海図のない旅路であり、多くの人々が手探りで暗い海を毎回のように岩礁に乗り上げながら進んでいる状況である。それは大学関係者にとっても同じで、彼・彼女らから現場の、とくに「総合的な学習の時間」なる新しい授業については「見えない」のである。

## プロジェクトの練り直し

私はプロジェクトの企画書を一から練り上げることにした。課題は簡単であった。見えないなら見えるようにすれば良いのである。既に多くの参加校が決定していた。専門的な見地から見れば、必ずしも著名な実践というわけではない。だからこそ、意味がある。

これらを並べ一望できる展示空間を作れば、日本の探究活動の現状確認ができる「ミュージアム」ができるだろう。そのためには展示の厚みを作る必要があった。子どもたちの学習成果物だけではなく、学習プロセスを展示し、さらには大学博物館での授業や私に関わっている学校を巻き込んで、「探究活動の手法」を探究する試みも行なう。その上で探究活動モデルや現状を分析できる枠組みを提示する。

## 「新しい学び」の同窓会

展示を作りながら、はたと気づいた。ここに展示されているものはすべて一九八〇年以降の実践である。歴史年表を見て、なるほどと思った。一九八〇年代、日本の教育はそれまでの詰め込み教育から経験重視の教育、つまり「ゆとり教育」へと方針転換した頃であり、その中心的役割を担ったの



が「臨時教育審議会」（臨教審）<sup>九</sup>であった。

そこで提示された概念が「生涯学習」。「社会教育」（博物館）と「学校教育」（学校）を結びつけるものである。この頃にまかれた種がこうして、「社会教育」と「学校教育」の連携の場であるこの展覧会に一堂に会したのである。

この展示は一九八〇年以降の日本の「新しい学び」の同窓会なのだと思った。もしそのように考えれば、本展示に海外の動向や一九八〇年以前の日本国内の探究活動の蓄積が提示されていないことは大きな誤りとは言えなくなる。

### 展示に命を与えるために

完成した展示空間を前に、しかし、これだけでは不十分であると感じた。この空間は未だ息をしていない。

<sup>九</sup> 本書では臨教審の詳細には立ち入らない。そのため、本書の臨教審理解はかなり大雑把なものである。本書の臨教審理解の大枠は寺脇研（二〇一三）『文部科学省』中央公論社などの著作の影響を受けている。臨教審についての詳細な議論は渡部蒔（二〇〇六）『臨時教育審議会―その提言と教育改革の展開―』学術出版会を参照。

展示空間に生氣を吹き込むためには二つのことが重要であった。一つは児童・生徒作品を子ども自身に紹介してもらうこと。作品の多くが児童・生徒によるプレゼンテーションを前提に作られている。そのため、それだけを展示するのでは不十分であった。参加・協力校には無理を言って申し訳なかったが、ほとんどの学校から児童・生徒がプレゼンテーションのために来てくれた。そのために展示空間の真ん中に大きなスペースを作り、プレゼン用のポスター台をその都度、配置した。そのスペースは日頃、寂しい空間ゆえに大型モニターを常時設置し、日本中から探究活動を募集して展示した。

もう一つの試みは展示空間に示された日本の探究活動全体が持つ問題を克服するためのものだった。つまり、その空間には骨がなかった。理論が、信念が、情念がなかった。なぜ、探究活動なのか、そして、探究活動とは何なのか、その全体像に共通する骨格、つまり、「モデル」がなかったのである。会期一ヶ月前、日本中に手紙を送った。「新しい学び」、そして、日本の戦後教育史に貢献した人々、その時代精神を代表する人々を講演者として招聘していった。それは展示発表を各校に求めたのと同じく、ほとんど強引なやり方だった。

### 「ミュージアム」という小宇宙

展示に際して重視されたのは、「ミュージアム」の基本的な機能のもとに、この空間に日本の公教育

の小宇宙を描き出すことであつた。「ミュージアム」はそもそも「コレクション」から端を発する場所であつた。コレクションは世界中のものを収集し分類しようという途方もない試みであつた博物学から生まれた<sup>二〇</sup>。つまりミュージアムは世界の全部<sup>二一</sup>小宇宙であり、それゆえに一つの所有権力を提示する場所であつた<sup>二二</sup>。

既に示したように「探究活動」は海外にも、そして日本の教育史上にも散見されるものであり、厚みのある教育伝統である。本展示はその中で一九八〇年代以降の公立学校を舞台とした新しい学びとしての探究活動を——やや行き当たりばったりなサンプリング手法で<sup>二三</sup>——集めたものである。

<sup>二〇</sup> 博物学については、メルル、リン（大橋洋一・照屋由佳・原田祐貨訳）（二〇〇四）『博物学のロマンス』国文社やバーバー、リン（高山宏訳）（一九九五）『博物学の黄金時代（異貌の十九世紀）』国書刊行会を参照。

<sup>二一</sup> ミュージアムと権力については松宮秀治（二〇〇三）『ミュージアムの思想』白水社を参照。

<sup>二二</sup> これまでの京都大学総合博物館のアウトリーチ活動で培ったネットワークや第三者を通じた紹介などの手法で事例は集められた。

## 特別展の教育学上の意義

現在、探究活動をめぐる教育研究・書籍は、教科教育での実践研究<sup>二</sup>や図書館利用などの実用書<sup>四</sup>などが中心であり、「総合的な学習の時間」の歴史やその全容を探ろうとするものも見受けられるが<sup>一五</sup>、全体像を提示する研究は乏しい状況であった。

今、日本の公教育の現場における探究活動がどうなっているのか、そもそも探究活動とはどのようなものであり、その基本的なモデルはどのようなものか、明らかにしたり提案したりするものは見受けられないのである。

特別展は「探究活動」を説明する一つの端緒として、いびつな小宇宙を提示しようとしたものであ

一三 田尻信壹(二〇一三)『探究的世界史学習の創造』梓出版社など

一四 片岡則夫[編著](二〇一三)『なんでも学べる学校図書館をつくる ブックカタログ&データ集』少年写真新聞社、小川三和子(二〇一〇)『教科学習に活用する学校図書館』全国学校図書館協議会等  
一五 高橋亜希子(二〇〇八)「戦後の高等学校における総合学習の歴史的変遷―青年期の『学び』の回復としての試み」『中央学院大学社会システム研究所紀要8(2)』一〇一―一五頁は総合学習の歴史的変遷を検討している。また、浅沼茂編(二〇〇八)『「探究型」学習をどう進めるか』教育研究開発所は理論的な検討と豊富な事例で探究活動を進める上で大きな道しるべを示す研究となっている。ただし、そこで紹介されている事例は研究者の活動をベースにした探究活動とは一線を画した、学校教育の伝統や学級活動の延長にある総合学習である。

る。それを形にした本書は二十一世紀初頭の探究活動を提示するための予備調査<sup>一六</sup>なのである。

### 3. 構成と方法

#### 本書の構成

本編に入る前に、先に示した「経験」と「知識」の揺り動きからなる、日本の教育の変化と現状を年表形式で押さえておきたい。その上で本編に入る。

第一部において探究活動のモデルを理論的に示す。理論研究では従来、哲学者の議論を引用したり整理したりすることが多かった。しかし、今回はあくまでも日本の戦後教育史の系譜に位置し、とくに学校現場に強く貢献した論者の講演から探究活動の「モデル」を提示する。これは、探究活動の「モデル」を日本の教育史の関連物として、つまり、学者と現場と行政の三つ組みの関係性から生まれるものとして捉えたいからである。

第二部において現在の日本の探究活動の全容を明らかにするための予備調査を行う。具体的には特

---

<sup>一六</sup> 本書での検討はあくまでも予備的なものである。とくに第二部で示された枠組みをもとに二〇一五年度に全国的な調査が行われる予定である。

別展のために収集した実践事例を提示・分析しながら、日本の探究活動の多様性をどのような観点から捉えればいいのか、調査のための枠組みを荒削りながら提案したい。

第三部において第一章、第二章を受けながら、本展示の端緒であった「海の学び」の着想を軸に、博物館チームが行った探究ワークショップ、プログラム開発を中心に記録する。この章での取り組みは現在進行中であるため、上の二つの章にはある「総合考察」をあえて省略し、あくまでも「記録」に徹している。本章の取り組みは次年度以降、京都大学総合博物館で展開される「海の学び」の礎であり、本章の吟味はその後の活動の中で行いたい。

## ポリフォニー空間における語りとブリコラージュ

最後に、本書に通底する一つの方法論を示しておきたい。

本書に示した事例や講演録は基本的に余り組織立って集められたものではない。既に「いびつな」や「行き当たりばったり」と表現したように、なぜあの学校が入っていないのか、なぜあの人が呼ばれていないのか、そのような疑問が起きるのは当然のことと考えている。それはこの特別展の経緯に依るものであり、個々の学校や講演者に責を負わせることはない。

ただし、特別展において展示の方針として一つ重視したものがあつた。それは「多様性」である。

たとえば、個々の事例についてはSSHの学校もあればそうでない学校もある。普通科の学校もあれば専門学科の学校もある。小さな科学者を作ることに主眼をおいたものもあれば、あくまでも生徒の進学意欲をかき立てるためのものもある。それらを一つの価値観の中で優劣を付けるようなことをしないようにした。

最も理想としたのは、それぞれが微妙な差異と矛盾をはらみながら一つの空間で個々の声が響き合う情景である。このような状況を「ポリフォニー（多声）空間」な状況と呼ぶなら、本書で一つの見識を示すということは、それら様々な声が、音が、響きあう中から一つのメロディを紡ぐような作業である。換言すれば、様々な要素、語りの断片から一つの物語を語ることかもしれない。

このような有り合わせのものから一つの物語を作るということを、有り合わせの材料から行う日曜大工になぞらえて「ブリコラージュ」とでも呼べるかもしれない。寄せ集めであっても、集められたものが多様であるからこそ、「生み出された文脈の異なる様々な……資源をブリコラ的につむぎ合わせれば、そこに新しい物語＝認識枠組みを作り出すことができる」と考えられる<sup>一七</sup>のである。

本書で提示される見識は一つの研究計画のもとで要領よく集められた個々の事例や講演録を総合や

---

<sup>一七</sup> 蒲生諒太（二〇一二）「失われる私とそれに気付く私——喪失における自己認識の観点から」『教育方法の探求（二五）』四十九—五十六頁、五十一頁

統合するものではなくて、微妙に異なり矛盾しあうユニークな事例と語りを一人の編者の語り直しの  
中で一つにつなげられるブリコラージュである<sup>一八</sup>。

二〇一五年三月 極東アジアの湊町にて

蒲生 諒太

<sup>一八</sup> このような「ポリフォニー」と「物語」の着想の多くを生涯発達心理学者で、本邦のナラティブ  
研究の草分け、やまだようこによる「ナラティブ」と「多性対話」の一連の研究から影響を受けてい  
ることを記す。